

## 寺脇研さん記念講演

「第13回障害者の高校進学を実現する全国交流集会」15日の全体会、寺脇研さんによる記念講演「私が実現した高校の希望者全入～適格者主義の呪縛を超えて」について、分科会でのコメントとあわせて紹介する。司会を務めており、時間などが気になり聞き漏らしたことも多いので、メモを取った箇所だけ要約する。

文部省で生涯学習を担当し、1993年から広島県教育長として教育行政の現場に向き合う。テレビで高校進学できない問題を知り、広島県の県立高校「希望者全入」を実現させた。その後、ある事件をきっかけに広島県の全入は廃止されたが、高校教育無償化などの動きもあり、高校の「希望者全入」の流れは今も続いている。逆方向はないが、それを邪魔する動きはある。「全国学力テスト」は競争を煽り、障害者などを排除し、適格者主義の呪縛を復活させる恐れもある。大阪市の吉村市長が、テスト結果を教員のボーナスなどに反映させるという酷い話まで出てきている。そもそも指定都市で成績を比べることに、どんな意味があるのか、まったく理解できない。

道徳の教科化も、教育のあり方として重要な問題を投げかけている。ある教科書には、「犠牲の精神」など憲法に反することが書かれている。一方で、これから始まる「公共」という科目には注目している。子どもたちが「総合学習」で教師だけでなく、いろんな人と接するようになり、若い人たちに変化がみられる。

適格者主義の呪縛は、学校が英語・数学といった「主要教科」中心に組み立てられていた時代の反映でもある。AIが急速に発達し、障害者にとっても役に立つことが多くなる。学校もAIで可能になること以外の科目が大切になり、適格者主義の呪縛からも解き放たれるだろう。「いつでも、どこでも、だれでも学べる」ことがこれからも求められる。



第1分科会での寺脇さんのコメントから。一地域により違いはあるが、「定員内不合格」という現実を前に、障害当事者、家族、支援者、教員、行政などが、それぞれ問題に向き合っていくことが大切。障害当事者らが抱える個別の問題を、どうやって一般的な問題、教育の課題にもっていくか。

障害当事者の「学びたい」という意志が大切だ。学力よりも、「まなびたい」という意志を確認するような方法を検討していかななくては。教えるではなく、学ぶことが重要だ。いま定員割れが問題になっており、なぜ「定員内不合格」という事態が起こるのか。高校、教育のあり方が問われている。

2018年9月20日)